

# 博士学位請求論文審査報告

2012年3月14日

申請者 井上 征剛  
論文題目 アレクサンダー・ツェムリンスキーの《夢見るゲルゲ》  
——現実ともうひとつの世界をめぐる歌劇

審査委員 田辺秀樹  
古澤ゆう子  
武村知子

## 1. 本論文の内容と構成

本論文は、アレクサンダー・ツェムリンスキー (Alexander Zemlinsky, 1871-1942) 作曲の歌劇《夢見るゲルゲ Der Traumgörge》(1904-06) について、その成立の過程を追い、作品を台本と音楽の両面から詳細に分析するとともに、ツェムリンスキーの他の歌劇作品、さらには、ほぼ同時代を生きた他の作曲家による歌劇をも視野に入れながら、20世紀前半の歌劇に共通する問題意識に光をあて、ツェムリンスキーの歌劇のもつ先駆的な意味を明らかにしたものである。本論文の構成は次の通りである。

### 第1章 作曲家ツェムリンスキーの再評価と歌劇《夢見るゲルゲ》

- 1-1 音楽史におけるツェムリンスキーの位置
- 1-2 作曲家としての再評価
- 1-3 ツェムリンスキーの歌劇と《夢見るゲルゲ》の位置

### 第2章 新しい歌劇への道——《夢見るゲルゲ》成立の経緯

- 2-1 作品概要
- 2-2 成立事情と原作
- 2-3 最初期の構想
- 2-4 《人魚姫》——死の交響曲
- 2-5 《マールワ》、《勇猛なるカッシアン》と新しい歌劇への分岐点
- 2-6 4つの歌曲
- 2-7 フェルトとの共同作業——『哀れなペーター』、『見えない王国』、再び『猫橋』
  - 2-7-1 「哀れなペーター」と新作歌劇の主人公像
  - 2-7-2 フォルクマン＝レアンダー『見えない王国』
  - 2-7-3 ズーデルマン『猫橋』
- 2-8 エピローグをめぐる問題
- 2-9 歌劇の成立プロセスと、原作と歌劇の関係から分かること

### 第3章 歌劇《夢見るゲルゲ》の音楽と夢見る主人公の物語

- 3-1 ツェムリンスキーの音楽語法
- 3-2 主人公の造型と、他の登場人物の人物像の提示  
(前奏～第1幕第1場～第5場)
  - 3-2-1 前奏とゲルゲの人物像
  - 3-2-2 グレーテ、村人たち、ハンス (第1幕第1場～第5場)
- 3-3 夢とメルヒェンの引用 (第1幕第6場)
  - 3-3-1 歌劇全体の中心としての第1幕第6場

- 3-3-2 川の情景とゲルゲの内面
  - 3-3-2-1 川の音型と長調・短調の間の往復
  - 3-3-2-2 三和音の継続
  - 3-3-2-3 円環形の「夢の主題」
- 3-3-3 ゲルゲの歌と調の変化
- 3-3-4 『白雪姫』の物語と、外から聞こえる「夢の声」
- 3-4 王女と、異世界との接触（第1幕第7場～第9場）
- 3-5 ゲルトラウトの「変身」——メールヒェンと現実の境界
  - 3-5-1 悪意に満ちた世界と、エピソードとしての男爵の物語（第2幕第1場～第2場）
  - 3-5-2 ゲルトラウトのふたつの面（第2幕第4場～第5場）
- 3-6 ゲルゲの2度目の内面告白と、聞き手としてのゲルトラウト（第2幕第6場）
  - 3-6-1 歪められた主題
  - 3-6-2 ポリフォニー・ラビリンス
  - 3-6-3 「川の情景」の再現
  - 3-6-4 芸術家の挫折
- 3-7 ゲルゲがゲルトラウトを発見するとき（第2幕第7場～第10場）
- 3-8 ゲルゲにとってゲルトラウトはどのような存在か。そして、エピローグを前に  
なお残る問題
- 3-9 エピローグの「ハッピー・エンド」
  - 3-9-1 ゲルゲの「成功」と村人たち（エピローグ第1場～第2場）
  - 3-9-2 「ハッピー・エンド」とゲルトラウトの変貌（エピローグ第3場）
    - 3-9-2-1 作られた「ハッピー・エンド」とその動揺
    - 3-9-2-2 ゲルトラウトが王女と結びつくとき——歌劇の結末
- 3-10 第1幕、第2幕、エピローグに共通する構造と、断ち切られたサイクル

#### 第4章 現実と異世界をめぐる歌劇

- 4-1 エキゾチックな禁断の地から現実をとらえる手段へ  
——歌劇における異世界の意味の変容
- 4-2 19世紀に書かれた、異世界との往來を描く歌劇
- 4-3 ドヴォルザーク《ルサルカ》とダルベール《低地》にみる、境界を越える者  
への共感
- 4-4 現実と異世界の間
  - 4-4-1 ドビュッシー《ペレアスとメリザンド》  
——もうひとつの世界へと消えていく者たち
  - 4-4-2 ディーリアス《村のロメオとジュリエット》  
——もうひとつの世界からの声を聴く力
  - 4-4-3 アリアーヌとサロメ  
——なみはずれた力を持つ主人公
- 4-5 芸術家の運命
  - 4-5-1 シュレーカー《はらかな響き》  
——もうひとつの世界に触れることのできない作曲家
  - 4-5-2 ブラウンフェルス《鳥》  
——理想の世界を見出し、かつ失う芸術家
  - 4-5-3 クシェネク《ジョニーは演奏する》——漂流する作曲家
  - 4-5-4 ヤナーチェク《利口な女狐の物語》  
——もうひとつの世界との幸福な出会い
- 4-6 歌劇《小人》——芸術家の意地
  - 4-6-1 芸術家としての小人と、「無垢なる少女」ではない王女

- 4-6-2 夢見るギター
- 4-6-3 小人と芸術家の運命
- 4-7 歌劇《白墨の輪》——雪嵐の中で叫ぶ
- 4-8 現実ともうひとつの世界をめぐる歌劇にみる、歌劇という制度の問い直し

## 第5章 《夢見るゲルゲ》が目覚めるとき

- 5-1 《夢見るゲルゲ》初演の中止とその後
- 5-2 70年後の初演
- 5-3 2007年6月、ベルリン
- 5-4 2011年10月、東京

## 付帯資料（別冊）：

- 譜例、表、図版
- ツェムリンスキーの歌劇・《夢見るゲルゲ》をのぞく7作品の概要
- 参考文献表

## 2. 本論文の概要

第1章では、作曲家ツェムリンスキーの音楽史における位置が論じられる。マーラー、シェーンベルク、R. シュトラウスなど同時代の独逸の作曲家たちのなかであって、ともすれば保守的、あるいは折衷的と見られ、20世紀前半に活躍したもののその後忘れられたツェムリンスキーが、1970年代以降、徐々に再評価が進んで今日に至った経緯が概観されたあと、歌劇《夢見るゲルゲ》が、この作曲家について語る上でさまざまな理由からとりわけ注目すべき作品であることが指摘される。その理由は第1に、この歌劇が作曲当時、ウィーン国立歌劇場で初演される予定だったのが、芸術監督のマーラーの辞職のために中止され、その後70年以上経ってから初演されたという特異な運命を持つ作品であること、第2に、この作品のその後の上演史が、「再評価」から「忘却」、そしてまたしばらくしてから「再評価」へという、現代において、知られざる歌劇作品が取り上げられる際に現れる状況の典型を示していること、第3に、この歌劇が作曲されたのが、恋多き女性アルマ・シンドラーとの恋愛関係と、やがてアルマがマーラーと結婚したことによる失恋という心の痛手、さらには、義理の弟であり作曲を教えた弟子でもあるシェーンベルクとの関係が疎遠になったことなど、ツェムリンスキーの私生活において重大な局面が生じた時期であったこと、第4には、この時期にツェムリンスキーが、調性音楽の枠内にとどまりながらより柔軟な表現を行うという独自の作曲手法を確立したこと、さらに第5としては、当時のオーストリアの社会情勢が社会主義、反ユダヤ主義、シオニズムなどの諸傾向とともに急速に不安定化し、社会に対する芸術や芸術家の関係に大きな変化が生じ始めていたこと、とされる。

第2章は、台本作者レオ・フェルトとの協働を経て歌劇《夢見るゲルゲ》のテキストが最終的な形になるまでの経緯を跡づけた、詳細な台本成立史である。物語の素材として検討の対象とされるのは、ゲーテの小説『若きウェルテルの悩み』、ハイネの詩『哀れなペーター』、スイスの作家ケラーの小説『村のロメオとユリア』、世紀末ドイツの人気作家ゾーデルマンの小説『猫橋』、19世紀後半ドイツの童話作家フォルクマン＝レアンダーの童話『見えない王国』、アンデルセンの童話『人魚姫』等であり、いずれも主人公の社会における孤独感、希望の持てない恋愛、女性による救済の真偽などをテーマにした文学作品である。著者はこれらの作品を、先行研究の成果をふまえつつ、より徹底的に比較検討し、台本完成への道筋を整理することにより、《夢見るゲルゲ》の台本が、ツェムリンスキーのウィーンでの音楽生活への失望感を色濃く反映していること、アルマとの不幸な恋愛という苦渋の体験にとらわれながらも、歌劇の創作を通じてそこからの脱却をはかろうとした、自己告白的な意味をもつ作品であることを明

らかにしている。

第3章は、この歌劇の音楽面についての精緻な楽理分析である。「前奏曲」、「第1幕」、「第2幕」、「エピローグ」からなるこの歌劇のそれぞれの場面で、ツェムリンスキーが独自の作曲技法を用いながら人物や出来事を巧みに描いている様子が、数多い譜例とともに明らかにされている。個別の項目について詳しく紹介する余裕はないが、夢想家の主人公ゲルゲ、彼が疎外感をいだく現実世界、それとは異なる「もうひとつの世界」としてのメールヒェンの世界、幻視される「王女」、現実の女性との結びつきによる救済の真偽、などについてなされる音楽面からの分析は、いずれも、みずから作曲を学び作曲の実践もしている著者の、音楽についての鋭い洞察力と楽曲分析のすぐれた力量を窺わせるものである。とりわけ、主人公が「もうひとつの世界」の象徴としての「王女」に出会う第1幕第6場を作品全体の山場と捉え、主人公＝作曲家自身の願望のありようを音楽面から詳細に分析した部分、さらに、エピローグで、現実と妥協することで一定の社会的成功を収めた主人公が、現実の女性を伴侶とし、一見ハッピーエンドで終わるともとれる結末を迎えながら、最終場面の音楽が、結局は解決されない和音を積み重ねたまま鳴り止むことの意味を論じた部分は、説得力にあふれ、第3章の白眉ともいえるものになっている。

《夢見るゲルゲ》が作曲された20世紀初頭には、メールヒェンないしはメールヒェン的な物語を題材とする歌劇が多数書かれた。本論文の第4章では、そうした作品としてドヴォルジャークの《ルサルカ》、ダルベールの《低地》、ドビュッシーの《ペレアスとメリザント》、ディリアスの《村のロメオとジュリエット》、デュカスの《アリアーヌと青ひげ》、R. シュトラウスの《サロメ》が取り上げられ、「もうひとつの世界との出会い」という観点から《夢見るゲルゲ》との比較がなされる。さらに、《夢見るゲルゲ》を芸術家が主人公の歌劇としても捉える著者は、同様の問題意識をもつ歌劇としてシュレーカーの《はらかな響き》、ブラウンフェルス《鳥》、クシェネクの《ジョニーは演奏する》、ヤナーチェクの《利口な女狐の物語》、さらには《夢見るゲルゲ》以後に作曲されたツェムリンスキーの歌劇である《小人》と《白墨の輪》なども比較の俎上にのせ、そこから、20世紀という新しい時代に芸術家が社会から理解されることの困難という共通のテーマを浮き彫りにしている。

「《夢見るゲルゲ》が目覚めるとき」と題された最終章では、ツェムリンスキーのこの歌劇が初演されることもなく忘れられ、70年以上を経た1980年によくニュルンベルクで初演され、それ以後徐々に再評価が進みながらも、必ずしも歌劇場のメジャーな演目にはなっていない、という作品受容の状況が、2007年にベルリン・ドイツ・オペラで著者自身が見た上演の印象なども交えながら語られ、本論文は閉じられる。

### 3 本論文の成果と問題点

アレクサンダー・ツェムリンスキーは、マーラーやシェーンベルク、R. シュトラウスといったほぼ同時代の独逸の作曲家たちのように、すでに広く知られ、さかんに研究されている作曲家ではなく、1942年に亡命先のアメリカで没して以後、人も作品も長らく忘れられ、1970年代以降、徐々に再発見が進むなかで、作品の演奏や上演がされるようになってきた作曲家である。本論文の成果は、まず第1に、いまなお評価が定まっているとはいえないこの作曲家の歌劇作品、なかでも、さまざまな点から最も重要な作品と考えられる1904・1906年作曲の《夢見るゲルゲ》に焦点を絞り、豊富な文献資料を用いてこの作品の成立の過程を明らかにするとともに、「現実ともうひとつの世界の交錯」という観点に立って、台本と音楽の両面から詳細な分析をなし遂げたことである。それにより、従来は同時代の大作作曲家たちの間にあってもすれば折衷的とか保守的、あるいは中途半端な前衛としてどちらかといえば否定的にとらえられがちだったツェムリンスキーは、20世紀の芸術家が社会との関係のなかで直面させられた困難な状況を歌劇として誠実に作品化した、見かけ以上に先鋭的な面をもつ作曲家として、新たな相貌を獲得することとなった。第2の成果としては、メールヒェンを素材とする同時代の他の作曲家の歌劇作品と《夢見るゲルゲ》の比較、さらにはツェムリンスキーの他の歌劇作品

との比較を通じて、20世紀前半のヨーロッパのオペラに共通する問題に光をあてたことが挙げられる。《夢見るゲルゲ》という作品について、これだけ徹底的に調べあげ、分析しつくし、その意義を説得力をもって論じた個別研究は、現在のところ日本はもちろん、欧米にも存在せず、この論文はツェムリンスキー研究のみならず、20世紀独逸のオペラ研究の進展にも確実な寄与をするものとして高く評価することができる。さらに、本論文が終始明快な達意の文章で書かれていること、とりわけ、生硬にして難解な楽理の専門用語をできるだけ避けながらの詳細な楽曲分析が、音楽について分かりやすく説明する著者のすぐれた能力を証明していることも、特筆に値しよう。

しかし、本論文にも不満の残る点がないわけではない。対象となる歌劇の成立史と作品分析が非常に充実しているのにくらべて、作品が生まれた背景となる世紀転換期のウィーンの社会状況についての論述は、あきらかに手薄と言わざるを得ない。この部分にさらに広く深い目配りがされていたならば、本論文はよりいっそう興味深いものになったであろうと惜まれる。また、第4章で展開される同時代の他の作曲家たちの作品についての論述は、それぞれに割り当てられた紙幅が少ないだけに、必ずしもすべてが説得的とはいいがたい。しかし、これらの問題は本論文の全体としての価値を大きく減じさせるものではなく、また著者自身も今後取り組むべき課題としてじゅうぶんに自覚していることが、先に行われた口述の最終試験においても確かめられた。著者が本論文を出発点として、今後ツェムリンスキーを中心とする研究をさらに深め、また広げてゆくことが望まれる。

#### 4. 結論

以上のことから、審査員一同は本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

## 最終試験結果の要旨

平成24年3月14日

論文審査担当者

田辺 秀樹

古澤 ゆう子

武村 知子

平成24年2月28日、学位請求論文提出者 井上 征剛 氏の論文「アレクサンダー・ツェムリンスキーの《夢見るゲルゲ》——現実ともうひとつの世界をめぐる歌劇」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、井上 征剛氏はいずれも十分かつ適切な説明をもって応えた。

よって、井上 征剛氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。